発達検査と対人援助学

⑲ 単純化、相対化される社会における子育て

大谷多加志

アメリカで 2 度目のトランプ政権が発足し、その言動が日々世界を揺るがせています。関税や軍事支援などを交渉のカードにして、相手から譲歩を引き出し、自国の経済的利益を最大化していく手法は、掲げられたスローガンである「アメリカファースト」を実現するものであり、ビジネスとしては成功、経営者としては敏腕、ということになるのかもしれません。強い方が勝つ、という極めてシンプルな原則を、「これが現実だ！」と恥ずかしげもなく言っているようで、なんだか時代がわからなくなるというか、世の中の反動のものすごさを思い知るというか、やりきれない気分になります。しかしながら、少なくともこの大統領が正当な選挙の手続きを経て選出されたことは事実です。つまり、この現象は世が望んだから生まれてきたことではあるわけです。連載のテーマである発達や子育てから大きく乖離したような話題ではありますが、今日はここを入口に考えてみたいと思います。

N スペに感じた違和感

先日、ちょっとした機会を得て、2016 年に放送された NHK スペシャル「ママたちが非常事態？」の DVD を視聴しました。リアルタイムからはかなりの周回遅れですが、現在書いている他の原稿と関連するのでは…という学科の同僚の勧めを受け、視聴してみることにしたのです。内容は、前評判通りとても面白かったです。短信に書いた、共同研究でお世話になっていた赤ちゃん学研究センターも登場し、お世話になった先生の少し若い頃の姿を画面の中に見つけたりもしました。同僚の教員が言うには、この番組は学生さんにもとても好評だったそうです。私も基本的には楽しく観たのですが、一方で少しだけ違和感がありました。それが何なのか、少し考えて思い至りました。

この番組では「ママたちが非常事態？」というテーマの通り、産後うつや子どものイヤイヤ期など、お母さんにとっての厳しい状況について、科学的な見地から説明をしていきます。例えば、産後の母親のメンタルの変化については、オキシトシンなどのホルモン分泌が妊娠中から産前、産後でどのように移り変わっていくかのデータの示し、それがお母さんの心理面にどのような影響を与えるのかを説明します。またイヤイヤ期の子どもについては、脳科学的な観点から、子どもの欲求がどのように生じ、そしてなぜ大人や周囲の働きかけに応じて修正することが難しいのかを説明していきます。

また、発達とともに（脳の成熟とともに）、このような行動のコントロールが可能になっていくプロセスについてもさまざまな実験を通して解説していました。

断っておくと、このような説明自体には何の異論もありません。番組の MC や出演者の方も「理由がわかると安心する！」「こう対応したらいいんだぁ」と感想を述べておられましたし、視聴者の保護者さんたちも同じように感じた方が多かったのではないかと思います。

合理的説明と正しい対応？

少し気になったのは、これらの説明によって、子育てや子どもの行動のすべてが理屈で説明でき、理由がわかれば何事も正しい対応ができるような印象をもたらしそうだと感じたことです。番組では脳科学や生理学の知見なども多く紹介されていて、これらの説明は一定の説得力がありますが、脳科学にありがちな、若干言いたい放題な感じも否めません。脳ではこんなことが起こってる！という説明に対しては、否定の仕様がないですし、何となく納得させられます。また、理由がわかるとすっきりする感覚があるのもわかります。ですが、正直言って、子どもってそんなわかりやすい存在でしょうか。子どもは大人の「理屈」とはどこか違う軸を持っていて、大人の軸に当てはめて理解しようとすることで、何かズレが生じたり、大事な要素を見落とすことにつながる気もするのです。ある意味、子どものことはよくわからないし、ここからどう育っていくのかも見通せない中で、それでも 1 日 1 日続いていくのが、養育者にとっての育児であるように思っています。

最近、時々耳にするようになった言葉に「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉があります。イギリスの詩人であるジョン・キーツが述べた言葉で、「急いで事実や理由を求めず、不確かさや不可解なことがある状態の中に留まることができる力」とされています。ますます先を見通すことが難しくなった時代の中、私たちより先の時代を生きる子どもたちを育てていくために、大人にも簡単に答えを求めず不確かさと付き合っていく力が求められているのではないでしょうか。

現代社会に漂う閉塞感

ここで最初の話題に戻るのですが、現在の社会が「強いものが正義」というシンプルなところに立ち戻ってしまっている背景には、シンプルな理屈や、それを行使して状況を変えてくれる人を、どこかで人々が求めてしまっているからのように感じます。

それは言い換えれば、社会が全体として閉塞感に包まれていることの反動と言えるかもしれません。思い当たるのは日本において若者から何となく漂ってくる諦念のような雰囲気です。「勝ち組・負け組」や「親ガチャ」という言葉ににじんでいるように、人生には勝者と敗者がいて、そしてそれは“生まれ”によっておおむね決められているのだという感覚が、どこかに根付いているように感じます。自分の人生なのだから他人のせいにするなという言い分もあると思いますが、少なくとも若者は社会に対して不公正感や統制不能感を感じているのだと思いますし、そのような社会を構成している上世代としては、やはり何か申し訳ないような気持ちになります。

自分の人生を生きる

一方で、どのような境遇にあっても、それでも自分の人生を豊かに生きる道はあるのだとも思います。さらに言えば、いわゆる社会的な勝ち組であっても、よくよく見れば勝ち組であるための何か（お金だったり、権力だったり）に囚われて、実はそれほど豊かには生きられていないように見える人もいます（負け惜しみみたいですが）。でも、これからますます先が見えない社会を生きていく次世代に、自分の人生を豊かに生きる力を育んでおきたいとは願っています。しかし、それは結局どのような力なのでしょうか。

ひとつ、個人的にこれがポイントなのかなと思うことがあります。今年の夏、京都劇場で開催された「みうらじゅん FES」に夫婦で行ってきました。妻がもともとみうらじゅんさんのファンなのです。みうらじゅんさんは「ゆるキャラ」や「マイブーム」という言葉の産みの親でもあり、フェスでは独特の感性とゆるさが入り混じったトークを楽しみました。そのトークの中に「比較三原則」という言葉がありました。シンプルにいえば、「人と比較しない」ということで、それを信念にしているという話でした。それだったら『非比較三原則じゃないか』『三原則なのに 1 個じゃないか』と頭に浮かびましたが、一方で、確かに「人と比べない」ことはシンプルながら大事だなと思いました。嫉妬や劣等感などは、人との比較の中から生まれてくる感情ですし、勝ち組が感じている優越感だって、自分と誰かを比べる中で感じるものです。そして、優越感を感じている人は、同時にその優越性を失うことを恐れもするわけで、やはり「人との比較」という縛りの中に囚われているように見えます。

仕事柄、子育て中の保護者さんとお話しすることも多いのですが、「習い事って何をしておいたらいいですか？」とか「英語って、何歳くらいからするのがいいですか？」などの質問を受けることがあります。基本的に子どもが好きなものをやればいいし、楽しめるなら何歳でもいいのでは…、とお答えしていて、それが本心です。一方で、このような質問をしたくなる保護者の心境に思いを巡らせると少し切ない気持ちになります。何かひとつでもいいから役に立つ武器を持たせたい、あるいは、成功体験を積み重ねられるようにしてあげたい、というような、切なる願いを感じます。これは親心としてとても自然なものだと思いますが、その裏には何か悲壮なものもにじんでいて、先行きが見えない社会に送り出すことになる我が子に、何かせめて持たせてあげるものを探しているようにも感じられました。

ただ、これらの「武器」はどちらかと言えば「勝ち組」になることの助けになるもので、豊かに生きることには直結しないかもしれません。自分の人生を生きる力を育むには、まずは“好き”を育てることが必要であると感じます。大人にできることとしては“好き”を見つけるチャンスを作るくらいしかできないかもしれません。子どもの“好き”には、特に理屈も効率も将来性も関係ありませんので、「そんな、何の役にも立たないことばかり…」と“好き”を大人が否定してしまうこともあります。ここは、少し注意が必要かもしれません。有能だからではなく、わが子だから、特に理由も利益もない「好き」を見つけたことを、心から喜んであげて欲しいです。